

聖書：コリント人への手紙第一 3：10～17

説教題：この土台の上に家を建てる

日時：2022年2月27日（朝拝）

パウロは前回の3章6節で「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」と農業のイメージで話をし、9節で「あなたがたは神の畑」ですと言いました。教会は神の畑、神が実りをもたらそうとして働いておられる場所。植える者、水を注ぐ者など色々な働き人を用いつつ、これを心にかけて育てておられるのは神である！と語られました。その「神の畑」のイメージと並んで9節に「神の建物」とも述べられていました。教会は神が色々な働き人を用いて建て上げている建造物でもあります。このイメージのもとで今日見る10～17節のことが語られます。

さっそく内容を見て行きますが、まず10節に「私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました」とあります。パウロはここでコリント宣教を振り返っています。彼がしたことは土台を据えたことです。6節で「私が植えて、アポロが水を注ぎました」とありましたように、コリントで最初の福音の種蒔き、いわば開拓伝道をしたのはパウロでした。今は建築のイメージで語っていますから、今度は「土台を据える」という言い方になっています。彼は「賢い建築家のように」と言います。自分を賢いと表現するのは行き過ぎではないかとも思われますが、これまでこの手紙ではずっとこの世の知恵と神の知恵、この世の賢さと神の賢さが対比的に語られて来ました。おそらく十字架につけられたキリストという神の知恵を宣教する宣教者としてパウロは自分のことをこう述べたのでしょう。彼が決して自分を誇っていないことは「私は、自分に与えられた神の恵みによって」と語っていることから明らかです。コリント宣教のわざはただ神の恵みによったことを彼は告白しています。

そして彼は「ほかの人がその上に家を建てるのです」と言います。これは誰のことでしょう。パウロの後にアポロがやって来て水を注いだと6節で言われましたが、アポロは今、コリントにはいません。ですからパウロは自分とアポロのことだけを考えていたのではないことが分かります。ここで考えられているのは、今コリントでリーダー的役割を果たしている人々です。今、据えられた土台の上に家を建てている人たちです。それはリーダーたちだけではありません。教会を建て上げるわざは全信者に

関わります。コリントにいる信者一人一人も神の家を建て上げる教会形成のわざに参加しています。ですから今日の話は今日の私たちみなにも当てはまるものです。一人一人はどのように建てるかについて注意しなければならないとされています。

ではパウロはどういう意味での「注意」をここで呼び掛けているのでしょうか。そのことは次の11節とセットで読む時に見えて来ます。11節冒頭には「というのは～だからです」という言葉が原文には入っています。新改訳もこの文章の最後を「～だからです」と訳すことによって、そのことを表しています。つまりこの11節にはパウロが10節のように語った理由が述べられていることとなります。なぜパウロはどのように建てるか、それぞれが注意しなければならないと言ったのでしょうか。それは「すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないから」です。「その土台とはイエス・キリストです」とされています。何を言っているのでしょうか。これは言い換えれば、家を建てる者たちは自分の好みに従って、自分勝手に建物を建てることはできないということです。自分が建てたいと思う建物を建てるために、今からそれに見合った土台に変えることはできない。イエス・キリストという土台はすでに据えられています。ですからこの土台をよく認識し、この土台に良く一致する建物を上に建てなければならない。土台と性格が異なるチグハグな建物を上に建てないように！ということです。このように見るとパウロのポイントが分かって来るのではないのでしょうか。パウロはこれまで見て来た通り、十字架につけられたキリストを中心とする福音を伝えました。ところが今、コリント人たちはそれを蔑み、この世が誇る知恵、この世が誇る価値観を教会に持ち込み、それによって教会を立派なものにしようとしていました。パウロはそれはできない！と言っているわけです。据えられた土台は十字架につけられたイエス・キリストです。ですからよく注意して、その土台と合致する同じ性質のものを上に建てるようにしなければならない。これがパウロのポイントです。

このメッセージをさらにはっきりさせるために彼は言葉を続けます。12～13節に「だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。『その日』がそれを明るみに出すのです。」とあります。「その日」とは、1章8節に出て来ましたように、イエス・キリストの再臨の日を指します。その日に「火」によってそれぞれの働きは試され、真価が問われるとあります。そこには二つの結果が現れます。一つはその建物が残るということです。火で試され

でも大丈夫。火に耐える建造物であったことが判明します。もう一つはその建物が焼けてしまうことです。この二つのグループに分かれます。この光の下で、先に出て来た金、銀、宝石、木、草、藁も考えられることとなります。このリストを見て分かることは、前半3つは火で試されても残り、後半3つは火で試されると燃えてなくなるということです。これは何を私たちに語っているのでしょうか。

前半の金、銀、宝石で家を建てた人とは、ズバリ一言で言えば、パウロが述べた福音にとどまる人のことです。十字架につけられたキリストを土台とし、この福音に立って教会の建て上げに励んだ人です。その人の働きは残ります。やがての日に、この人は神の建物の建設のためにとっても意味のある大切な働きをした人であることが明らかにされます。その日に分かることは、その人は金や銀や宝石で家を建てて来たということです。これらはエルサレム神殿の材料を思い起こさせます。たとえば第一歴代誌 29 章 2 節に、ダビデが神殿建築のために用意した資材リストの中に大量の金、銀、宝石があったことが記されています。つまり十字架につけられたキリストを土台とし、そこに立つ歩みをささげた人は、あのソロモン神殿が指し示す真の神の宮を建てるために貴重な働きをした人であることが明らかにされるということです。

一方の木、草、藁で家を建てる人とは誰のことでしょうか。これはパウロの福音、神の知恵に立って歩むことをせず、この世の知恵、この世の価値観に立って歩んだ人です。2 章 6 節に、この世の知恵に立つこの世の支配者たちは「過ぎ去って行く」人々と言われました。同じくやがての日にこの世の知恵、この世の価値観は過ぎ去ります。それはこの時代だけのもので次の時代には残りません。ですからそれはやがての日にはまさに燃えてなくなるのです。その日になって、その人が建てて来たものは木、草、藁で建てたようなものでしかなかったことが判明するわけです。

さらにそれぞれには「報い」と「損害」という続きのあることが述べられます。火で試されても建物が残った人には報いが与えられると 14 節にあります。私たちの救いはただ神の恵みによります。十字架につけられたキリストという土台それ自体そうです。そのキリストに感謝し、より頼んで私たちは家を建てる働きに加わります。私たちは自分に与えられている賜物、能力、時間、財、自分自身をささげて用いていただきます。そのこと自体恵みです。そしてかの日に火で試されて、それが残ります。その日、私たちはこんな自分が神の御国の最終的な完成のために貢献することができ

たと知り、喜びに満たされます。これも恵みです。ところがそれで終わらないと聖書は言います。その人は「報い」を受けます。これは何でしょうか。ここでは詳しく語られていません。しかし他の箇所から、そこには「よくやった。良い忠実なしもべだ。」という主の称賛のお言葉が含まれることが分かります。この後、4章5節でも神からの称賛が与えられると言われます。また「よくやった。良い忠実なしもべだ。」という言葉に続いて、次のように言われることがマタイの福音書25章21節に記されています。「おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」ここからさらに多くのものを任されること、すなわちさらなる光栄な奉仕と与えられることが分かります。また詳しい内容は分かりませんが、主ご自身が大いに喜んでおられて、その喜びをともに分かち合う祝福の中に入れられることが言われています。ただ恵みに導かれて、その歩みを導かれただけなのに、主はその私たちの歩みを喜ぶあまり、さらに報いを加えてくださるという将来があるということ聖書は語っています。

一方、建物が焼けた人は損害を受けます。これは救いを失うという意味ではありません。15節に「その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」とあります。キリストに信頼しているなら救われます。しかし損害を受けます。多くの学者は、これは報いを受けられないことを指すと考えています。一方ではそれを受ける人がいるのに、こっちは人はそれを受けられない。この人の悲惨は、この日のことを想像してみるといくらか分かって来ます。その人はこの日、大変なショックを受けることになるでしょう。自分が地上で過ごして来たことが何も残らないのです。その日について完成に至った教会に自分が貢献できたことは何もなかったか、ほとんどなかった。自分の地上の歩みは黒煙を上げてみな燃えて消えてしまう。それはその人にとって大なる辱めの出来事となるのではないのでしょうか。そして「その人自身は火の中をくぐるようにして助かります」とあります。命からがら助かるのです。しかしこの表現は、建物が残るもう一方の人については言われていません。つまり建物が燃えてなくなる人は御国に入ることは入るのですが、全身焦げた匂いを漂わせながら入って行くということになるのでしょうか。ギリギリやっとなどり着くという状態です。この光の下で私たちは地上の自分の歩みを考えなければなりません。コリント人はこの世の知恵を高く評価し、この世の称賛、この世の地位、この世の栄光を求めていました。しかしパウロはこうして本当の称賛、本当の地位、本当の栄光はかの日に与えられる！と言っているわけです。それらが欲しいのであれば、その日を目

指して歩め！と。そしてその日の称賛と栄誉は十字架につけられたキリスト、神の知恵に立って、これに忠実に歩む人にこそ与えられるのです。

最後の16～17節はさらなる警告を与えるものです。パウロは16節で「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。」と問います。パウロがここで言う「あなたがた」とはコリント教会です。新改訳で「自分が神の宮」とか、「神の御霊が自分のうちに住んでいる」と訳されているのを見ると、個々人のことを言っているようにも見えますが、そうではありません。「知らないのですか」とパウロが問うているのは、コリント人たちがこのことを十分に受け止めていないように思われるからです。そして17節で言います。「もし、だれかが神の宮を壊すなら」と。パウロがここで考えているのは、これまで見て来た通り、コリント人たちの分派の問題です。この章の3～4節でも、彼らの内にはねたみや争いがあること、「私はパウロにつく」「私はアポロに」などと言っていたことが記されていました。1章12節にはさらに「ケファにつく」「キリストに」と言っている人たちもいたことが記されていました。そしておそらくこの四者にとどまらず、この時のコリント教会におけるリーダーたちを巡っても同じような争い、党派的行動があったのでしょう。パウロはそれは神の宮を壊すことだ！と言います。それは単なる人間社会の問題ではありません。神の御霊が住む聖なる神の神殿を破壊する罪であると。その人については「神がその人を滅ぼされます」とあります。この「滅ぶ」という言葉は、その前の「壊す」という言葉と原文では同じです。つまりその人が神の宮を壊すなら、その人自身が壊される。あるいはその人が神の宮を滅ぼすなら、その人自身が神によって滅ぼされる。自分がした通りの報いを受けるということです。そしてこれはその人が救われないということを意味します。前の15節の「火の中をくぐるようにして助かります」では収まりません。悔い改めずに神の宮を壊す行動を取り続ける人は、こういう報いを刈り取ると言われています。私たちはこの教会生活において聖なる神の宮の一部として歩んでいるということに恐れを抱かなければなりません。17節最後に「神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。」と言われていきます。この言葉をしっかり受け止めることから、私たちの教会での振る舞いが導かれなければなりません。

今日の箇所から、私たちは神の建物の建築に携わっていることを覚えさせられます。しばしば今日の箇所は、それぞれ個人個人がキリストという土台の上にとどのように自

分個人の家を建てるかというメッセージとして語られる場合がありますが、ここでの関心は教会の建て上げです。教会のリーダー的立場にある人は特に心に留めなければなりません。先に見た通り、教会形成は皆に関わりますので全員に当てはまります。私たちはどのように神の建物を建てる者たちでしょうか。パウロのメッセージは十字架につけられたキリストという土台に基づいてそのことをせよ！というものです。この世の知恵や価値観に訴えて教会活動をする方が一見魅力的で、華やかで、周りの人々を引き付けられるかもしれません。それはこの世では金で建てた家のように見えるかもしれません。しかしかの日になって分かることは、実はそれは木、草、藁で建てた家であったということです。それはやがての日に全部焼けてなくなってしまいます。それに加えて、もし言い争って教会を壊す歩みをするなら、その人自身の救いもなくなると警告されています。私たちが改めて注意すべきは土台は十字架につけられたイエス・キリストということです。私たち杉並教会の土台もそうです。先立つ働き手によってその土台は据えられました。またそれに続く人たちが、そこに立って家を建てて来ました。さらに続く私たちもどのように建てるかに良く注意しなければなりません。もう一度、十字架につけられたキリストこそ土台であることを覚えて、この方こそを私たちの誇りとし、この方に感謝して私たちの賜物と奉仕をささげ、この方こそを宣べ伝える歩みへ進みたいと思います。そのように注意して家を建てる時、やがての日に明らかにされることは、それは金や銀や宝石で家を建てる歩みであったということです。それは永遠に価値が残る歩みであったということです。その者たちは神の家の完成のために貢献し、良くやった！と主からお褒めの言葉をいただき、さらに報いを頂くこととなります。この日を目指して神の知恵なる福音にこそ立ち続け、キリストという土台の上にふさわしく家を建てる歩みへとなお励まされて行く私たちでありたいと思います。